西川伸一の オススメシネマ⑥

カメラを止めるな!

（日本 2018 年）

各種の映画レビューで高い評価を受けていた。これは観に行かなければ。ところが、それは私の苦手なホラー映画だった。ホラー映画を撮っている撮影クルーがゾンビに襲われるという筋立てで、さしておもしろくない。これでなぜ絶賛されるのか。四〇分近く経ってエンドロールが流れる。どう理解していいのか。席を立ちたくなった。ところが！

「一か月前」と字幕が出て、場面は一変する。実はこの前振り映画は、ホラー専門チャンネル開設の第一回の放送分として作られたことが明かされる。監督に起用された「安い、早い、質はそこそこ」が評判の日暮隆之（濱津隆之）は、テレビ局から生放送・全編ノーカットで撮るよう求められる。つまり「カメラを止めるな！」

集められた俳優たちはみな曲者ぞろい。女優役の松本逢花（秋山ゆずき）は「かわいこぶりっこ」丸出しでごねるし、ゾンビ役の細田学（細井学）はアル中だし、録音係役の山越俊介（山﨑俊太郎）は出された硬水のペットボトルに「おなかを壊す」と苦情を言う。監督役の黒岡大吾（イワゴウサトシ）とメイク役の相田舞（高橋恭子）は不倫関係にあった。

日暮の妻・晴美（しゅうまはるみ）は元女優で、娘の真央（真魚）はVシネマのADをしている。母親譲りの一途な性格ですぐに周囲と衝突し、父とも口をきかなくなってしまう。一方、晴美は内心では女優への思いを捨てがたく、日暮の台本を熟読していた。晴美は真央と二人で撮影の見学を日暮にねだって、認めさせる。

ついに撮影当日。同じ車で現場に向かっていた黒岡と相田が、交通事故で到着できないとの連絡が入る。日暮は監督役を自身が演じ、メイク役には晴美を充てることを決断する。そして放送開始。台本どおりに進まない事態が次々に発生する。酔い潰れて使えない細田、硬水を飲んで現場で排泄してしまう山越などなど。晴美は役に入れ込みすぎてかえって邪魔に。もはやこれまでと、モニター室は「しばらくお待ち下さい」の画面を出そうとする。そこに真央が飛び込んできて、てきぱきと指示して話をつなげる。真央自身も台本を頭にたたき込んでいた。

そんな撮影中にラストシーンで使うクレーン機材が壊されてしまう。これがないとラストが撮れない。モニター室にいたプロデューサーの古沢真一郎（大沢真一郎）がカメラワークの変更を提案する。日暮は珍しく台本を叩きつけて抵抗するが、所詮「質はそこそこ」の監督だと我に返って従おうとする。ここで、真央が台本から落ちた一枚の写真を拾ってひらめく。そして「今動ける人間何人いる?」と叫ぶ。

映画はラストシーンへ。真央は人間ピラミッドを作らせて、カメラを手に最上段にいる日暮の上に立ち上がってラストを撮りきる。真央が手にした写真には、子どもの真央を肩車する日暮が写っていた。父娘の関係修復が裏テーマだったのだ。

放送を観終えたテレビ局幹部の笹原芳子（竹原芳子）が、「みんな、これから忙しなるで」とご満悦に話す。背後でのドタバタなどつゆ知らずに。このシーンがいい。映画のポスターに「席を立つな。」とある。おもしろかったぜ！

（八月一三日・TOHOシネマズ日比谷）

（にしかわ・しんいち／明治大学教授）